

《退官者の挨拶・退官者を送る》

本郷1956—1996



富 永 健 (化学専攻)

私が理学部化学に進学したのは1956年(昭和31年)で、以来この3月まで40年間のほとんどを本郷の理学部でお世話になったことになる。

化学科進学のに御退官の木村健二郎先生の後任として無機化学、さらに放射化学講座を担当された斎藤信房先生の研究室に入れていただき、1958年から大学院の研究生活が始まった。私のテーマは「錯体のホットアトム化学の研究」であったが、核変換に伴う化学反応を対象とするホットアトム化学は、当時のわが国の乏しい研究設備のもとで、放射化学の分野で国際的に太刀打ちできる数少ない研究課題の一つであった。大学院時代(1959年)に、初来日したF.S.Rowland教授(当時はKansas大)に注目されたのが、その後今日に至る彼との長いおつき合いの始まりである。

1963年、博士課程修了とともに理学部化学科(斎藤研究室)の助手に採用された。発見されてまもなくノーベル物理学賞(1961年)が与えられたメスバウアー効果の化学的応用に、東大からお茶大水に移ったばかりの佐野博敏博士らとともに取組んだのはその頃のこと、鉄錯体の光・放射線分解への応用はこの分野の開拓的な研究となった。

1967年から1年半をカリフォルニア大アーバイン校のRowland教授のもとで博士研究員として過ごして帰国すると、東大では紛争が激しくなりつつあった。慌ただしい情勢の中で1968年講師に昇任、久保学部長のもとに設けられた若手教授会メンバーからなる幹事会に加えられたが、これは化学科以外の理学部教官との交流を深める最初の機会となった。

1973年、大磯で第1回の放射化学日本協力セミナー(日本側代表者:木村健二郎名誉教授;米国側代表者:F.S.Rowland教授)が開催され、当時助教授であった私がScientific Secretaryとして会議のお膳立てを行った。この日米セミナーは、放射化学のほぼ全領域にわたり日米の主導的研究者が参加したもので、以後のこの分野における日米の研究協力や人的交流を促進するの

に重要な役割を果たしたが、私自身もA.P.-Wolf, G.R.Choppin, R.H.Herber教授ら著名な学者を知己に得て今日まで交流は続いている。因みに第2回の放射化学日米協力セミナーは、私が日本側代表者となって1982年米国で開催された。

1977年、教授に昇任し、恩師斎藤信房教授の後をうけて放射化学講座を担当した。斎藤研究室でのテーマであったメスバウアー分光法は、引き続き新たな応用や測定法の開発によってさらに発展させた。また、この後1987年に、山中湖畔で第13回国際ホットアトム化学シンポジウム(IHACS XIII)を組織委員長として主宰することになるが、私の興味はすでにホットアトム化学から無機光化学・レーザー化学、さらには中間子化学へと移りつつあった。

一方、Rowland教授が1974年に指摘したクロロフルオロカーボン(いわゆる特定フロン)によるオゾン層破壊の地球環境問題としての重要性には早くから注目していたが、当時わが国では大気化学の研究者はほとんどいなかった。1978-9年にトヨタ財団からの研究助成を基にして、オゾン層破壊や温暖化の原因となる大気中微量成分ガスの精密分析に着手し、現在まで17年間にわたり南北両半球のバックグラウンド濃度の観測を続けてきたが、今日では、われわれの分析法や測定値は世界的に最も信頼性の高いものとして認められている。

理学部の教授会メンバーとしての27年間には、人事委員長、会計委員長、教務委員長、企画委員などを一度ならずおせつかり、理学部には大してお役に立てなかったものの、私自身はこれらの委員会で多くの他学科の先生方と接する機会を得て幸いであったと思っている。この他、地殻化学実験施設には創設以来の運営委員、および施設長として2期ご縁があった。また、理学部放射線管理委員長として10年ほどアイソトープ・放射線関係のお世話をさせていただいた。

全学の方でも、1988年から3年半ほど東京大学放射線安全委員会の委員長をつとめたが、その間に病院のアイソトープ問題が発生し、その対応や安全管理体制の抜本的見直しに当時の有馬総長にもいろいろご心配いただくことになったのは苦い経験である。引き続いて1992年から東京大学アイソトープ総合センター長という責任の重い仕事を引き受けているが、こちらは「無事これ名馬」をモットーに4年間の任期をどうやら順調につとめ上げられそうである。

近年、地球環境問題への関心が高まるとともに、私どもは、オゾン層破壊関連の研究の草分けということで、

第1の専門である放射化学よりも、第2の専門ともいえるべき大気化学の方が本業と見られるようになった。1987年以降オゾン層保護への国際的取組みが進む中で、環境庁、通産省など行政への専門家としての助言を求められることが多く、中央環境審議会をはじめ審議会・委員会・検討会等々十指に余る委員を兼業する羽目になったが、地球環境保全は化学者としての社会的な義務でもあり、余人をもって代え難い役割には若干の時間と努力を割くのもやむを得ないと考えている。

このような協力のためか、1990年には環境庁長官から環境保全功労者として表彰された（この種の賞は理学部としてやや異色かと思うので報告しておく）。また、サッチャー英首相やオランダのベアトリクス女王の東大訪問に際しては、本学の代表選手ということで松野太郎教授や茅陽一教授（工学部）とともに、地球環境研究につい

て一席お話しするという楽しい(?)経験もあった。

かえりみると40年というのは長いようで短く、まさに「夢まぼろしの如く」である。大学を去るにあたって特別な感慨はないが、最近嬉しかったのは、昨年5月私の還暦に際して開催したミニ国際シンポジウム「CHRTフォーラム」のために永年親交のある Choppin、Herber、Rowland 3 教授が夫人同伴で来日してくれたこと（因みに CHRT はこの3人と私の頭文字）と、昨年10月 Rowland 教授がオゾン層破壊に関する業績でノーベル化学賞を受賞したことであった。

本郷で過ごした1956年から現在までを振り返って、思い出すままにとりとめのないことを書きならべたが、最後に、その間お世話になった多数の方々に厚く御礼申し上げるとともに、理学系研究科・理学部の今後ますますの発展を祈りつつ筆をおく。



富永健先生、ありがとうございました

薬袋佳孝(化学専攻)

富永健先生は、昭和52年より化学教室放射化学講座を担当、大学院重点化に伴い化学専攻無機・分析化学講座の所属となられた後も放射化学研究室を引き続き主宰され、本年停年を迎えられることとなりました。先生のご専門は放射化学・大気化学で、国内外で高く評価される業績を挙げて来られたのは広く知られる所です。また、これらの専門分野に留まることなく、無機化学・分析化学の広範な領域に研究を展開しておられます。この一方で、平成4年からアイソトープ総合センター長を務められるなど、本学の教育研究活動の推進に大きく貢献して来られました。学外においても、日本化学会副会長(平成6年より)等の要職を務められ、我が国の化学の発展に大きく寄与しておられます。国際交流にも大きな足跡を残され、放射化学分野に関する日米セミナーや第13回ホットアトム化学国際シンポジウムの開催、Radiochim. Acta 誌等の国際誌の編集を初めとして、広く活躍しておられます。また、Rowland 教授(カリフォルニア大学)を初めとする著名な化学者と個人的にも厚い親交を結ばれ、放射化学・大気化学とその関連分野の国際的な発展に大きく寄与しておられます。

このようにご活躍の先生に20年近くご指導を受けることが出来たのは、何とも有り難いことであったと思います。とはいえ、学生時代はもとより、職員として先生の元で研究を続けることとなりましてからも、先生には教えていただくことばかりの毎日でした。しかし、先生は、研究についても他のことについても、細かく指示される訳ではありません。むしろ、職員・学生の自主的な判断に委ねることが多かった様に思います。しかし、全くの放任という訳ではなく、要所を押さえた的確な助言を重要な所でいただいていた気が致します。これは、先生が、大局を見失うことなく、常に全体の方向性を考えておられるからと思われる。私も含めて研究の部分

的な所に目がとまりがちですが、先生は全体の位置付けに常に注意を払われており、的確に方向を修正されることがしばしばでした。もっとも私たち門下生には先生の意図が直ぐに理解出来ないことも多く、後になってお考えが判って来ることもしばしばでした。

先生は、研究の成果もさることながら、研究を進めて行くプロセスやその中に現れて来る職員・学生の人間としての個性に常に注意を払われて来た気が致します。研究室にはそれぞれに個性の強いメンバーが所属して来ましたが、その個性を生かしつつ、研究室としての集団の中での調和を取って来られました。これは、各人の個性を大切に、潜在的な能力を伸ばして行くことを重要と考えられてのことと思います。

研究室の外でのご活動については先生は余りお話しになりません。学会や会議などで他の先生からその辺のお話を伺うことがむしろ多かったように思います。これは研究室のメンバーに余計な気を使わせぬようにとのことのお氣遣いであったと思います。

このように、先生は常に紳士であり、側に居る者に品位と風格を感じさせます。外国の著名な先生との会食と同席させていただいたことがありますが、先生の洒脱な会話は様々な知識に裏付けられた多彩な話題に及び、なかなかついていけないこともしばしばでした。先生の品格は門下生の誰も届かない所ではありますが、その一部にでも近づくことが出来ます様、私共は努力して行かなければと思います。

門下生は、私を初めとして変な人間ばかりで、先生を悩ませ続けたのではと危惧しております。しかし、それぞれに、先生が示されて来た学問の道を新しい時代に向けて発展させて行くつもりです。

先生、本当に有り難うございました。

東大を去るにあたって

三津橋 務 (化学専攻)



近ごろ、いろいろな会に出ても、人の話を聞くのが苦手になった。最近の関心事から過去の出来事まで、様々な雑念が脈絡なく駆けめぐる。特に後者の比重が増しているのは、本郷やこの化学教室界隈の佇まいを、思い出と絡めて記憶に留めたいという力が働いているのかも知れない。

東大がどういうところか一度、見てみたいとはるばる旭川からやってきて、すぐに飛び出すつもりが、この歳までお世話になってしまった。汽車と連絡船に揺られて約30時間の道のりを、学生の頃、故郷が懐かしくて年に3度は往復していたが、便利になればなるほど距離感が狭まって望郷の念は薄れていった。

1957年、生物化学に惹かれていたこともあって化学科に進学した。当時、生物化学は化学科に属していた。それで、五月祭の時には生化のグループに加わったが、出し物はうさぎからATPを取り出して展示するというものであった。実際にATPを取り出す作業は助手の方がやってくれた。驚いたことに、鳴かない筈のうさぎが鳴きだしたのである。とても神経がもたないと悟り、生化行きは断念した。

大学院進学は有機化学の研究室に決めた。指導教官の島村修教授のご専門は有機反応の機構解析で、活気に満ちた大研究室であった。ところが修士課程に進学して間もなく先生が1年間、さらに直接指導を受けていた助手になりたての先輩が3年間、アメリカで研究されるといふ事態が発生した。要するに、私をコントロールする先生方が周囲に一人もいなくなってしまったわけである。勿論、手紙をやりとりして研究指導は受けていたが、国民学校以来の学生生活の中で、この時ほど楽しく開放感に満ちた時期はなかったと思う。これで勢いづいて2年で就職する予定を変更して、博士課程に進み、さらに助手になって研究を続けることになった。

大学紛争が落ち着いて、あと2年半で先生がご停年という時に博士研究員としてアメリカに留学した。1年目はゲインズビルという小さな市にあるフロリダ大学で、2年目はハーバード大学で研究することになった。どちらの生活も満足すべきものであったが、研究の結果次第

で思い出の質が変わってしまうことを身に染みて感じている。1年目は研究が思わぬ方向に発展して5つの報文に名を連ねることができた。風土的特徴と相まって当時のことは何から何まで輝いて見える。2年目は失敗の連続で、何等の結果も出せずに終わってしまった。業績もお人柄も申し分のない先生に付いていただけに、申し訳ないという思いは未だに続いている。

帰国して間もなく研究室は解散した。研究は教授一代限りというアメリカ方式がとられ、我々の帰属は宙に浮いてしまった。あとは私の流儀で「本来研究は個人的なもの」と割り切ってこつこつやってきた。お世話になった研究室には後輩の教官がいたが、それまでと全く変わらぬ態度で先輩として遇していただき、相談に乗っていただいた。これまで研究を続けられたのも、こうしたご支援の賜と深く感謝している。

昨年の4月から化学新館5階の北側の部屋にいて、工学部から遙か向こうの建物まで一望におさめることができた。真下では新1号館の工事が始まっていたが、遅々として進まない様子なので、ここにいる間は眺望を楽しむことができると考えていた。ところが、一旦基礎工事が完了すと、あれよあれよという間に5階を通り越してしまった。今や、化学新館だけではなく、安田講堂までが小さな存在になってしまった。何か戸惑いを覚えなくてもないが、完成後の景観が楽しみだ。

これまで、いろいろなところと共同研究して助けていただいた。心残りは他学科の先生方に相談に乗っていただく機会が一度もなかったことである。5階エレベーターを降りて左に曲がると化学の研究室が、右に曲がると物理の研究室が並んでいる。しかしながら、これまで一度も物理の領域に足を踏み入れたことはない。別に柵があるわけでもなく、見張りがいるわけでもないのに、心理的な壁は厚いようだ。何の予備知識ももたないで、よその領域にはいるわけにはいかないのである。時折、私が所属しているということで「理学部の某先生はご存じですか」と聞かれることがあるが、精々「お名前は存じておりますが、お仕事の方はよくわかりません」といえる程度で、自分の不勉強を見透かされているような気がしてばつが悪い。先生方の研究の概要がわかり、気軽に情報交換できるシステムがあれば、いろいろな面で利用できるのではないかと常々考えていた。いずれ、ホームページが浸透して、何時でも都合のよい時に仕事の内容や研究上の接点についての的確な情報を得ることができる、そういう時代が来るのだらうと思う。

長い間お世話になりました。理学系研究科のご発展を心からお祈り申し上げます。

三津橋 務先生を送る

岡 崎 廉 治 (化学専攻)

三津橋先生に初めてお逢いしたのはもう30数年も前のことですが、とてもそんな時間が経ったような気がしません。私が卒業研究のために入った島村研究室の2年先輩でした。当時は島村教授がアメリカに一年程出かけておられたときで、研究室ではスタッフ、学生とものびのびと(決してのんびりとではありませんでしたが)研究をしていました。その頃三津橋先生はトリアゼンという窒素を含む有機化合物の研究をしていました。私が研究室に入って二年位経った頃だったと思いますが、三津橋先生の書いた論文(^{15}N を用いた反応機構の決定に関するものであったと記憶しています)が新しい優れた論文を紹介する Chemistry and Industry (この雑誌は今ではもうあまり読まれていませんが、当時は多くの優れた速報を掲載していました)という雑誌のハイライト欄に紹介されました。今でこそこの種のハイライト欄をもつ雑誌もかなり増えていますが、当時有機化学の分野ではこの雑誌位しかなかったと思います。その三津橋先生の論文が輝いて見え、そのような論文を自分も是非書いてみたいものだったことをよく覚えています。考えてみると三津橋先生のその後の研究の底流にこのトリアゼンの研究がいつも存在していたように思います。

博士課程を修了してからも引続いて島村研究室に残りましたが、島村先生の退官後は他の研究室に移り、その後は、いろいろな研究者と共同研究をしながらも、ほとんど一人で研究してこられたと思います。トリアゼンの研究はその後、炭素—炭素結合の開裂で三級カルボカチオンを発生するという新しい反応の発見および有機化学反応における溶媒効果のユニークな評価法の開発へと発展しました。また、最近 twin 型電子受容体の合成を中心とした有機機能性物質の研究にも興味をもっておられ、物理化学の分野の研究者との共同研究もしております。

三津橋先生はその飾らぬお人柄ゆえ学生からも厚い信頼を受けています。必ずしも恵まれた研究環境になかったと思うのですが、そのような状況でも着実に優れた研究を続けられたのはそのお人柄からくる達観した、良い意味での個人主義があったからではないかと勝手に想像しています。

退官後も私立大学で教鞭を執られるとうかがっております。今後どうぞ健康にご留意のうえ活躍されますことを心からお祈り申し上げます。



思い出すこと

鵜澤 淑子 (地球惑星物理学)



私が地球物理学教室の図書室に勤務することになったのは昭和34年の秋でしたが、以来一度も弥生の地を離れずに定年を迎えることになりました。

当時の教室は緑に囲まれた木造二階建と平家の各一棟で今の大型計算センターのあたりにあり、田舎の分教場を思わせる簡素な建物でしたが中に住んでいる方々はみんな輝いていて元気で暖かい雰囲気を持っておられました。

図書室は二階建の方の一室にあり資料に埋れている状況でまもなく3号館の2階に移りました。初めは何をして良いかわからず不安でしたが徐々に慣れて何とか仕事ができるようになりました。しかし今のように図書室間の横のつながりもなく心細い思いをいたしました。やがて教室の職員の方々と友達になることができました。当時は昼休みにフランス語の勉強をしたり(講師は高野健三先生)、歴史の勉強をしたりして充実した楽しい時を過ごしました。

先生もそれぞれに魅力のある方が多く地震学の松澤武雄先生は温顔で慈愛に満ちた方でした。後任で東北大学から転任して来られた本多弘吉先生もたいへん優しい方でいつもほほえみを浮かべて接してくださいました。

ある年の宵には先生と職員で雛祭りをしたこともありました。

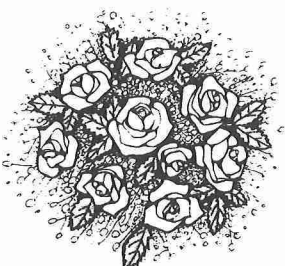
永田武先生は元気で気さくな方で時々お好み焼の会を所望され、会費は先生のポケットマネー、職員はお手伝いのご相伴というわけでした。よほど好きだったらしく外国から催促の手紙が来たと事務室の方は苦笑しながらも嬉しそうでした。

この他に威厳に満ちた坪井忠二先生、日高孝次先生、正野重方先生もおられ活気に溢れた時代でした。無知な者にとっては優しい先生あるいは近寄りやすい存在などとしか見えなかった方々が後になって考えるとそれぞれに世界的な学者なのでした。若い研究者も個性的な方が多くやや浮世離れの感もありましたが研究に専心している様子がうかがえました。この方々も立派な業績をあげられ、後に地球物理学研究の重鎮となられ世界に羽ばたいて行かれた方も多くおられます。

過ぎ去った日々はみななつかしく楽しい思い出となりました。

そうこうするうちに図書室はまた資料の増加のために4階に移ることになりましたが、ここで最初に見たのは学内紛争による安田講堂の攻防戦でした。窓を開けて見ていると催涙ガスで目が痛かったことを思い出します。この図書室が現在のものですが、今見えるものは建設中の新1号館で安田講堂はすでに隠れて見えません。

この間図書館界も機械化が進み便利になりましたが仕事の面では忙しくなりました。こんな中でいたらぬ私を暖かく見守ってくださり、困った時にはいつも気持よく助けてくださった教室の方々に深く感謝いたします。また、大勢の理学部の職員の方々、ことに図書職員の皆様にはたいへんお世話になりました。心からお礼を申しあげたいと思います。長い間ありがとうございました。



鵜沢淑子さんのこと

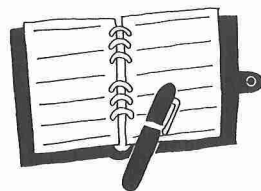
浜 野 洋 三 (地球惑星物理学専攻)

鵜沢さんが地球物理学教室の図書に來られてから何年が過ぎたかは、実は私には実感がありません。私が初めて鵜沢さんにお会いしたのは地球物理学科に進学した昭和40年ごろではないかと思います。当時、地球物理の図書室は理学部3号館の2階にありました。その頃3号館はまだ建てられたばかりで新しかったはずなのですが、2階は廊下が狭くて、汚くて、暗かった印象があり、30年経った今と全く変わっていない感じです。今も時々起こる水漏れもありました。これは本当はそんなはずがないので、2階の南側には教授の先生方の居室が並んでいて、今と違って扉がすべて閉められていたために、そういう印象があるだけかもしれません。とにかく図書室は、この廊下の真ん中あたりに教授室の向かいで、たしか海洋の水槽実験室のとなりがありました。狭いところに地震学教室以来の本がぎっしりと詰まっていた、閲覧室が狭く、コピー機（ゼロックスではなくリコーの青焼の機械）も書庫のいちばん奥においてありました。鵜沢さんの居場所もなかった様な状況であったと思います。その後、3号館が増築されて、図書は4階に移りました。この時もあれだけの本を移動した後で整理するのに、鵜沢さんは苦労されたと思いますが、私共は当時学生で、たしか、図書室にあった机や書棚をわれわれの地下の実験室にもらうことばかりを考えていて、ほとんど手伝った記憶はありません。本当に図書は利用するばかりで、鵜沢さん申し訳ありません。

さて、鵜沢さんには長年に渡ってお世話になりました。お世話になったことはいろいろありますが、図書室と図書の運営に関して、微妙なバランスを長年に渡って維持していただき、大変使いやすい図書室にさせていただいたことが一番であると思います。この点は、実は学科の図書室に対する、私の自分勝手にぜいたくな考えであり、最近の図書の風潮にはそぐわないのですが、こういう機会に述べさせていただきます。図書室に必要とされるこ

とは、いつでもたとえ深夜でも見たいときに見たい本がすぐに見られることです。これは図書室に深夜の午前2時ごろにもすぐに入ることができることがもちろん必要ですが、実はそれだけではだめで、見たい本が盗まれていたり、紛失したり、期限を過ぎても誰かが借り出したままに置いてはできないことです。図書室に誰でも自由にいつでも入れる状況で、かつ図書の管理が厳密に行なわれることが是非必要です。これはかなり人ごとのような言い草ですが、一方利用者からすると本を借りるとその本が自分の本のつもりで、いつも自分のそばに置いておきたくなります。特に自由にコピーがとれないころには、一層そうでした。私も結構本を借り出すほうでして、いまだに一人何冊という制限も知らないで済ませていて、鵜沢さんからもらう期限切れ図書の請求のリストには30冊ぐらいの本が並んでいました。地下にすんでいたころには鵜沢さんが4階から降りて、催促にこられたことも何回もあります。それでいながら、見たい本がないときには鵜沢さんにすぐ見たいとせつついていました。鵜沢さんに色々といあわせていただいてその日のうちには大抵手に入れていました。最終的に本が見つからなかったことは一度もなかったと記憶しています。このように地球物理の図書室は、利用者にとっては、大変使いやすい便利な図書室であったと思います。これは、われわれのような自分勝手な利用者が多い状況（少なくとも私のようなのが10人程度はいました）を考えると、図書室を維持するための、鵜沢さんの努力は並大抵のものではなかったと思います。本当にご苦労様です。

かなりかつてなことをかきましたが、鵜沢さん、本当に長い間、私を含めて自分勝手な利用者の面倒をよく見ていただき、かつ図書の管理をよくやっていただき、使いやすい地球物理の図書室を実現していただき、ほんとうに有り難うございました。



植物園での3年

矢内敏明（植物園）



3年前カタクリの咲く4月に生産技術研究所から植物園に着任し、緑豊かな自然に近い恵まれた環境の地で勤務させていただき、あれよあれよと言う間に時は経過し、来たるべきして来た定年を残すところ1ヶ月で迎えることになりました。

植物園での3年間と言う短い期間ではございましたが、その間に研究温室改築、園内環境整備ならびに分園の便所改築等の完成を見ましたことは、理学部・事務局の関係された方々のご尽力のおかげであると改めて御礼申し上げます。

私は、昭和41年1月宇宙航空研究所に採用され、以来農学部・工学部・生産技術研究所に勤務させていただきました。これもひとえにそれぞれの部局でお世話になった先輩・同僚の方々の暖かいご指導・ご支援の賜ものと深く感謝いたしております。

去るにあたりまして、お世話になりました理学部・植物園の皆様のご健勝と益々のご発展をお祈り申し上げます。

矢内敏明事務主任を送るにあたって

村上哲明、平原茂子（植物園）

矢内敏明事務主任は東京大学に29年7カ月間在職され、そのうち、平成5年4月から平成7年3月まで事務主任として植物園で事務管理等にあたられました。植物園に在職された3年間だけでは、とても矢内事務主任のことを言い尽くすことはできないと思いますが、私たちの矢内事務主任にまつわる思い出を述べさせていただきます。

一つ目は、研究温室改築に関わる思い出です。矢内事務主任は、ちょうどその改築期間中に着任されました。そこで工事の後半を前主任より引き継がれ、着任早々、関係各機関との折衝や連絡に忙しくあたられました。新しい研究温室は、研究部と育成部の教官・技官が長らく待ち望んでいてやっと実現したものです。研究温室が徐々にできあがっていく様子、形として現れた建物に寄せる期待を全ての職員より一心に受けとめられていらしたように思いました。

二つ目は、矢内事務主任の着任の翌年に植物園の環境整備が行われたことでした。道路改修、池改修、休憩所新設、藤棚新設、案内板設置、標識版設置など大規模な整備事業が行われました。約16万平方メートルという広大な植物園ですから、園内の環境整備が約3カ月の短期間に行われたことは、これまでに例をみなかったと思います。そのため、教職員や工事現場関係者との折衝を行うだけでも大変な仕事です。しかし、それだけではありません。植物園は、東京大学の教育実習施設であること

はもとより、小・中学校の学習の場でもあり、また一般入園者の憩いの場ともなっています。植物園の重要な使命の一つである一般公開業務の遂行とこのような大きな工事を両立させるために、入園者に対する気配りやご心労が特に多かったように思われました。年間約20万人の入園者でにぎわう植物園ですから、閉園をしないでこのような整備事業を無事に遂行できたのは、矢内事務主任の気配りに負うところが大きいと思います。

植物園にとっていずれも歴史的な大事業であった研究温室の竣工と環境整備による植物園内の各整備が矢内事務主任の3年間の在職期間中に行われたということは特筆すべきことです。これらを見事成し遂げられた矢内事務主任のことは、深く教職員の心に刻まれることになったと思います。以上のような大事業以外でも、たとえば、教官がつくった科研費などの書類に誤りがないか（大抵たくさん誤りがあるのですが…）いつもていねいにみて下さいましたし、台風や大雪など非常事態が発生した時は、常に真っ先に駆けつけて、適切な処置をして下さいました。高橋事務官が倒れたときに最も献身的に働かれたのも矢内事務主任でした。矢内事務主任のあたたかい気配りには、植物園の教職員一同、いつも感謝していました。これからは健康に留意され、ますますのご活躍を期待しております。

私と植物園 — 想いでふたつ

伊藤 義治 (植物園)



昭和31年10月に植物園に籍をおいてから、すでに40年目を迎えたことになりますが、振り返ってみると色々なことが目に浮かんできます。勤務当初の植物園はいまだ戦後の状態で、台地の中ほどから奥の部分は草ぼうぼうで、草刈りなどの作業を中心にやっていたおじさん達によって、冬になってやっと枯れ草刈りが一巡する有様でした。さらに一番奥に位置する針葉樹林は根株だけがやけに多く残っていたが、当時の話では、これらは戦後付近住民が夜な夜な燃料に切り倒した跡とのこと、日当たりがよくなったその辺は雑草が2 m以上にものびていたものです。

昭和30年度から系統保存事業により、内外から植物の種子交換がはじまり、56年の記録によると10,000余種の収集があり、種子をまいた鉢が所狭しと育成場に広がっていたものです。これらの資料を苗床でさらに育成しようとのことから私の出番になり、初期の職務と異なり、植物との深い繋がりになるきっかけになったとおもわれます。

戦後10余年荒れるにまかせていた場所(約350m²)の雑木を切り倒し、伐根は手仕事で行い、某大学から耕耘機を借用してやっと苗床に仕上げて稚苗を植えたものです。ところが目にする植物は名前すらまったく知らない

外国産が多く、自生地、栽培環境などについても同様に、それらを知るよすがとなったものは図書室の書籍であり、難しい洋書をひもとくきっかけとなったのはもちろんです。また、当時の園長(故前川文夫教授)は、1週間に一度勉強会と称して昼休みに話題の植物について Botanical Magazine などの洋書の解説をしてくださったり、古沢潔夫助教授からはさらに細部にわたる助言をいただいたものです。さらに学生の野外実習に自費参加させていただいたことなど、自己形成に大変役立ったと感謝しています。

収集された膨大な植物資料を如何に役立てるか、園内でどのように活かせるものか、論議の対象になったものです。初めの頃は管理が行き届かないことと、いたずらなどによって植えては枯れるの繰り返しであったようです。昭和54年(古谷雅樹園長)に園内の植生についての検討が始まり、昭和59年7月に示された「植物園における植生配置の現状と将来計画に関する報告」にその概要が示されたものです。それを受けて、平成元年3月に植物園専門委員会による「植生配置実行計画」が示されてから、やっと本格的に実行に移すことになったわけですが、年間わずかな予算を捻出していただき、育成部(技官)職員による手作りで行い、すでに7年を経過したが、全体の構想から見るとほんの一部の手直しにとどまり今日に至っています。この事業は人生後半に託そうとしたものですが、計画のために約10年の期間を費やしたことは、私にとっては返すがえすも残念に思われます。しかし、植物園スタッフによって、今後さらに優れた植生改良事業が遂行されることを期待しております。

最後になりましたが、40年にわたる間大過なく勤務できたのも、ひとえに学部の沢山の方々のご指導、ご鞭撻をいただいたお陰と深く感謝し、御礼申し上げてお別れのご挨拶と致します。



伊藤さんを送る

下 園 文 雄 (植物園)

伊藤さんは昭和31年に植物園に奉職され、40年間、一貫して樹木の収集と育成管理に勤めてこられました。伊藤さんが就職された当時の植物園は、戦後の復興も遅々として進まない荒れ果てた状態でした。まず、伊藤さんが手掛けられたのは、切り倒された樹木の根を掘り起こす作業など園内整備であったそうです。諸外国の植物園との種子交換や植物採集・野外調査などで集めた種子や苗木を育て、整備された園内にコツコツと植えこんでこられました。それゆえ、伊藤さんは園内の隅々まで熟知していて、どの植物が園内のどの場所に植栽してあるか、全部承知しておられました。我々では、植物は知っていても、その種類が植物園のどの場所に植栽されているかまでは、すぐには思い浮かびません。これまでは、伊藤さんに聞けば良かったものが、今後は、植生図と首っぴきであたかなければならなくなります。伊藤さんが余人を持って変えがたい人であったことがよくわかります。

昭和59年、東大植物園の将来計画が発表され、それに伴い園内の植生配置検討委員会が設けられました。その中であって、伊藤さんは精力的に資料作りを行い、植物園の将来100年を見越した植生配置計画および植生配置改良実行計画を作りあげられました。そして、それに基づいて、これまで収集してきた植物を園内に植えこんで来られました。しかし、植物園は予算も少なく人手もなく、植え込み時期に追われながらの植生改良事業は、遅々として進まず、伊藤さんにしてみれば歯痒い思いをされたことでしょう。今後の植生改良事業の行方も気掛かりのことと思います。今後は、我々が植生配置改良実行計画に基づき、後を引き継いでいきたいと思っておりますので、退職後もご指導のほどよろしくお願い致します。

植物園の長い歴史の中で大きな災害や変遷によって荒らされた時期が三回ありました。はじめは御薬園から植物園に変わる時、次は大正12年の関東大震災、昭和の太平洋戦争であります。その時、復興の現場で尽力された人たちは、植物園の歴史上に生きています。明治時代が内山富治郎氏であり、震災後が松崎直江氏でありました。戦後は混乱期が長くいろいろな人たちが復興に向けて努力されてきましたが、一貫して園内の植生改良に取り組んでこられた伊藤義治さんと云うことができます。

伊藤さんには多くの業績がありますが、なかでも、植物園に隔離保存されていたニュートンのリンゴの木（この木は、ニュートンが万有引力の法則を発見するきっかけになったものの枝を接ぎ木した苗木をイギリスより譲り受けたのですが、ウィルスに感染していた）の無毒化に成功されたことは有名です。伊藤さんがウィルスを除去して下さったお陰で、園内に植え出して入園者に見てもらうことができるようになりました。また、その苗木が全国の100箇所以上の施設や学校にも配布されています。伊藤さんは、ツツジに魅せられ、自ら、日本全国の山々を廻り、また、外国から種子を取り寄せ、ツツジの種類をたくさん集めてこられました。3年前、植生配置計画に基づき、植物園のほぼ中央にツツジ園が作られ、春3月～5月には見事な花を咲かせて入園者の人気を集めています。伊藤さんは多くの業績を残され、植物園にとって無くてはならない方でありましたが、第2の人生を千葉県緑の相談所で活躍されることが決まっております。今後も時々植物園に来て叱咤激励のほど宜しくお願い致します。お体に気を付けてご活躍して下さい。永い間、誠に有り難うございました。

